

「行為の哲学」の可能性

——1930年代のハイデガーと西田幾多郎の思索を手がかりに——

相楽 勉

今日哲学の存在意義が問われる場合、その応用可能性や考察方法としての有効性が問題になって、ともすると知自体の批判吟味という哲学本来の「使命」が二の次になる傾向がある。だから方法的有効性のみを求めるなら、ハイデガーの哲学は使いにくいのだろう。だが、それをまさに哲学として真に「有効」な仕方で生かそうとするなら、彼の思索のど真ん中を問わざるを得ない。その哲学的業績と政治的過誤なるものを秤にかけて整理するだけでは肝心のことが汲み取れないのではないだろうか。「実存論的分析」は学的で、ナチへの関与は政治的過誤というのは、まさに「誰」から見た正しさなのだろうか。ハイデガー的な「思索」とはそういう平均的考察のことではあるまい。

『存在と時間』の「実存論的分析」は確かに実存性一般の分析に終始するが、「時間性」と「歴史性」の分析に至ってこの分析自体がある実存的な「決断」によってなされたであろうことが明らかになる。この「決断」を問うこと、つまりはハイデガーとは「誰」かと問うことが、哲学的に「有効」ではないかと思うのである。その後の「国家社会主義」運動への関与も、「存在の歴史」の解釈も含めて、ハイデガーのテキストをこの謎から始まる一貫した道筋として読み解く時にこそ、ハイデガーに違和感を抱く「誰か」、つまり己自身のハイデガーとは別の「決断」が明確なものになるからである。

さて、本発表ではこのような「決断」としての思索を、全集 38 巻として編集された『言語の本質への問いとしての論理学』（1934）から汲み取ってみたい。総長辞職直後の学期に行われたこの講義は、『存在と時間』の実存論的分析に「国家社会主義」的概念を代入してナチズムの理念を説明した浅薄なものと誤解されることが多いが、むしろ彼自身の「決断」の根拠を明らかにしようと試みた点で、また「存在の歴史」の思索がなぜ不可避のものとなるのかを明らかにしてもいる点においても重要な講義である。この講義の思索を読み解くことを通じて、「決断」に基づく思索を「行為の哲学」としてまとめたい。ハイデガー自身も本当の思索は行為であると語っている（vgl. GA65, p. 5, GA79, p. 71）が、それは「思索」とは本来、現実から距離をとって眺めることではなく（つまり「観想」ではなく）、語るという仕方現実に関与する「行為」なのだという意味だろう。この「行為の哲学」は、抜き差しならない歴

史的現実との対峙において、理念と現実の間において、形成されたのだろう。それは、ハイデガーだけの問題ではなく、哲学の有効性・実効性を問われる今日の私たちの問題でもある。

さらに、この「行為の哲学」を考える上で参照したいもう一つの手がかりが、まさに同じ時期に西田幾多郎が試みた「行為的自己」の哲学である。西田とハイデガーの間には直接の関わりはなかったにもかかわらず、よく似た時代状況への対処において、両者間に偶然とは思えない符合が見出される。ハイデガーも西田も極めて「理念的」な自己理解（先駆的決意性・純粹経験）から「世界」を見出していて、それゆえ普通現実的なものの尺度と看做されている次元の事柄（政治的・経済的事柄）がほとんど視野に入っていないままに、現実的対応の「決断」がなされている。西田はハイデガーほど直接の政治的決断を迫られたわけではないが、それでも理念と現実の間に翻弄されざるを得なかった。ここでは特に「行為的自己」の対場と『日本文化の問題』（1940）や『国家理由の問題』（1941）のような議論がどう結びつくのかを取り上げる。

最後に、両者がこの現実状況との対峙を通して、「哲学」として筋を通しえたのかどうかを考えたい。特に「決断」の根拠になる「歴史」を、各々がどのようなこととして思索したのかを対比したい。そして、それを通じて今日における「哲学」の有効性について再考したい。